

高等学校体育科生徒の地域スポーツに対する意識に関する研究 —「地域」との連携意識を規定する要因の分析—

鈴木 秀利 丸山 富雄

キーワード：高等学校体育科，地域連携，キーパーソン，主導集団

A study on the awareness of community sport among students
majoring physical education at high schools
—An analysis of factors determining their affiliation consciousness with community—

Hidetoshi Suzuki Tomio Maruyama

Abstract

In this study the investigators tried to find out factors in students who seemed to have potential character to become a key person in community sport and to examine suitable guiding methods for preparing those students. Also, it was intended to obtain suggestions to indicate directions for promoting cooperative activities with their communities, for which a model was presented, by nurturing a leadership-taking group with a key person as its core. A questionnaire method was applied to 138 students, 102 males and 36 females, who were attending to physical education course at "S" senior high school in Miyagi prefecture. The survey was administered in November, 2003, and the responses were 100%. It was found that students who had following qualities might become key persons in the community sport:

1. Always most willing to participate in community events
2. Actively participating in school events
3. most willing to serve guidance in sports
4. better off in physical education classes
5. rich experiences in sports

In conclusion, it was suggested that class teachers should create a more eventful and enjoyable atmosphere in physical education classes.

Key words : physical education major course at high school, community sport, a key person, leadership group

1. 緒言

1. はじめに

21世紀を迎え、日本社会の少子高齢化が急速に進む中、体育・スポーツにおいては、健康づくりをテーマにした生涯スポーツの必要性が叫ばれている。学校体育においても、児童・生徒の心の問題や学校完全5日制に伴う余暇時間の増大などにより、従来の学校単独で実施していた内容・方法の抜本的見直しが求められている。

また、近年の学校運動部活動は、少子化による廃部や縮小、指導者の不足や高齢化による一貫指導の欠落、あるいは勝利至上主義や早期専門化育成によるバーンアウトなどさまざまな問題点を抱えている。しかし、運動部活動による教育的効果は多大なものがあり、新しいスタイルの運動部活動を工夫し継続していかなければならないと考えている。また、新たな施策として文部科学省から出された総合型地域スポーツクラブとの連携についても視野に入れながら、学校単位のみならず地域との連携の中で進めていく必要性が示されている。

日本の教育改革については、「教育改革に関する第1次(1985年)から第4次(1987年)」¹¹⁾のすべての答申において学校と地域の連携について触れている。さらに、中央教育審議会第一次答申¹⁶⁾の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(1996年)では、基本的には「ゆとり」の中で、子供達に「生きる力」を育てていくことが大切であり、学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、大人一人一人が責任を持って社会全体で取り組んでいくべき課題であると述べられている。

宮城県においても地域からの教育改革を目指し、1997年に「みやぎ新時代教育ビジョン」⁶⁾が策定された。大きな目標は、①主体的に考え生きる人づくり、②人々と支え合い生きる人づくり、③地球社会を生きる人づくり、の3点である。それに基づき、学校教育長期計画を定めている。長期計画の施策における重要な基本方向のテーマは、「開かれた学校づくり」である。今後の学校教育の在り方は、学校・地域社会とが相互の交流を進めていきながら、子供達の教育の充実を図る。そして、閉鎖的學校から能動的に地域とのかかわりを深めていくことを推進していくと述べられている。具体的には、①学校から地域社会への発信、②学校の地域社会への貢献、③地域の人材・資源の活用、である。

上記のことを踏まえ、今後の学校教育・学校体育は、今までとは異なる新しいシステムの再構築に迫られている。そこで、高等学校の保健体育の指導を通じて、生涯スポーツへの資質・能力の育成を視野に入れた取り組み方法を模索していかなければならないと考えた。

2. 研究の目的

1999年(平成11年)「高等学校学習指導要領」⁹⁾が改訂された。そのなかで保健体育科の具体的目標は、心と体を一体としてとらえ、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力の育成」「健康の保持増進のための実践力の育成」「体力の向上」の3つが密接に関連していることを重視している。また、高等学校の体育科生徒は、前述の保健体育科の具体的目標をベースにして、さらに、体育・スポーツの振興発展に寄与する資質や能力を育成しながら、将来は、地域の体育・スポーツの指導者並びに生涯スポーツ推進者として主体的に活躍していくことが期待されている。

スポーツ振興に関しては、ここ数年、行政主導型から住民主導型への転換期を迎えている。八代¹⁷⁾は、住民主導型のスポーツ組織が行政や学校と協力・連携し適切な役割分担を図りながら地域全体のスポーツ振興の核として機能するようなくみ、すなわち住民参加・主導型への新しいシステムの構築を提唱している。また、作野¹²⁾は、社会運動論に依拠し、先進的な住民主導型による地域スポーツクラブの形成過程モデルを提示している。さらに、主体的・自主的なスポーツ集団の組織を成功に導くためには、主導集団におけるキーパーソンの形成が不可欠であることを指摘している。学校体育においても、全生徒を強制的に駆り出しても地域連携・学社融合によるスポーツ振興の効果はあがらない。むしろ、主導集団を発掘し育成することにより、それによる全生徒への波及効果が大変重要であると考えた。

そこで、本研究は「地域連携」をキーワードとし、高等学校の体育科生徒の中で、どのような生徒が生涯スポーツ社会の期待に添えるキーパーソンとしての可能性を持つのか。また、そのような生徒を育成していくためには、どのような指導方法が最適かを検討する。具体的には、図1「地域との連携モデル」の要因A・要因Bを研究内容とし、運動部活動の新しい取り組み方や総合型地域スポーツクラブについての認識を授業において教授し、それに対する意識を、高等学校体育科生徒の属性及び学力、競技力等の調査結果との比較によって、キーパーソンの発掘を試みる。あわせて、要因C・要因Dを考察し、キーパーソンを核とした主導集団を育成し、それらによる全生徒への波及効果を導く学校の制度的な取り組み方や指導方法、さらに、地域連携活動の推進についての方向性について示唆を得ることを目的とした。

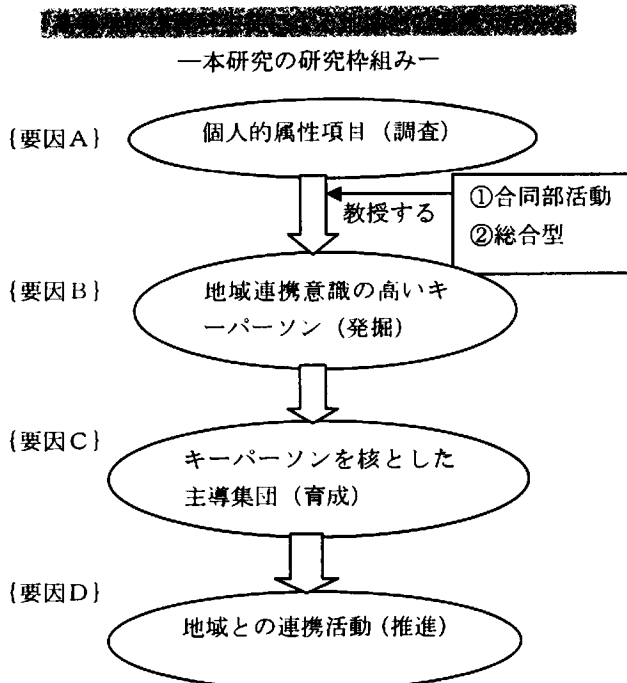


図1 地域との連携モデル

II. 研究方法

1. 調査対象者

宮城県S高等学校体育科

第2学年 男子44名 女子22名 計66名

第3学年 男子58名 女子14名 計72名

合計138名

2. 調査時期及び方法

平成15年11月下旬、調査対象者に対し、質問紙による集合調査を行った。回収数(率)138(100%)

3. 調査内容

- ・属性(学年, 性別, 性格)
- ・成績(学業成績, 体育成績)
- ・運動部活動(専門種目, ポジション)
- ・スポーツ意識(スポーツ観, スポーツ指導, 指導意向)
- ・行事参加意識(学校行事参加意欲, ボランティア参加経験, 地域行事参加頻度)
- ・スポーツにおける地域志向(合同部活動について, 総合型地域スポーツクラブについて)

4. 結果の処理

1) 回答の得点化

スポーツにおける地域志向の授業内容(①新しい運動部活動②総合型地域スポーツクラブ)についてのアンケートの回答に対し、「かなり賛成」を4点、「やや賛成」を3点、「あまり賛成しない」を2点、「反対」を1点と

得点を与え、等間隔尺度を構成するものとして数量化した。また、合同部活動得点(以下合同部活動とする)と総合型地域スポーツクラブ得点(以下総合型とする)の合計点を合成指標として2点から8点の得点を与え数量化した。

2) 分析方法

合同部活動, 総合型については、「かなり賛成」、「やや賛成」、「あまり賛成しない」「反対」の4つに分類し、地域志向については、得点の2, 3, 4点を「関心なし」、5, 6点を「やや関心あり」、7, 8点を「関心あり」という3群に類型化した。それらを従属変数として生徒の属性及び業績項目とのクロス集計をおこなった。また、度数分布ではかなりの偏りが見られることから、いずれも平均値による比較も行い、T検定による差の検定を行った。

III. 結果と考察

1. 高等学校体育科生徒の地域志向

1) 生徒の個人的属性項目と地域志向について

合同部活動・総合型・合成指標を従属変数とし、アンケートの調査内容である13要因とのクロス集計により、地域志向について考察した。

(1) 学年による比較

合成指標において、「関心あり」「やや関心あり」が3年生86.2%に対して、2年生は83.4%であった。なかでも「関心あり」については、3年生の値が高くなっている。上級生のほうが地域スポーツに対する意識が高い傾向にあるからであろう。

表1 地域志向についての学年の比較

学年	関心あり	やや関心あり	関心なし	総計	平均標準偏差
2年生	12 18.2%	43 65.2%	11 16.7%	66 100.0%	5.6818 1.1657
3年生	22 30.6%	40 55.6%	10 13.9%	72 100.0%	6.0139 1.3374
合計	34 24.6%	83 60.1%	21 15.2%	138 100.0%	5.8551 1.2646

(2) 性別による比較

合同部活動において否定的な意識に着目した場合、「あまり賛成しない」「反対」の合計が男子21.6%で女子11.2%に比べ倍近く高くなっている。この結果から、合同部活動に関する意識には性差があり、男子の方が否定的に捉え、逆に女子の方が肯定的に捉えていることがわかった。

表2 合同部活動に対する性別の比較

性別	かなり賛成	やや賛成	あまり賛成しない	反対	総計	平均標準偏差
男	17 16.7%	63 61.8%	20 19.6%	2 2.0%	102 100.0%	2.9314 0.6639
女	7 19.4%	25 69.4%	2 5.6%	2 5.6%	36 100.0%	3.0278 0.6964
合計	24 17.4%	88 63.8%	22 15.9%	4 2.9%	138 100.0%	2.9565 0.6713

(3) 性格による比較

総合型において、「かなり賛成」と「やや賛成」を合わせると、明るい・普通がそれぞれ7割以上に対し、おとなしいは5割で、明るい・普通を下回っている。さらに、平均値で比較してみると、おとなしいの平均が最も低くなっており、その他の生徒との間において、有意な差がみられた。性格が明るいほど関心が高く、中心的人物になりうる可能性があることが考えられる。

表3 総合型に対する性格の比較

性格	かなり賛成	やや賛成	あまり賛成しない	反対	総計	平均標準偏差
明るい	11 22.4%	27 55.1%	9 18.4%	2 4.1%	49 100.0%	2.9592 0.7626
普通	16 24.6%	34 52.3%	15 23.1%	0.0%	65 100.0%	3.0154 0.6958
おとなしい	3 12.5%	9 37.5%	8 33.3%	4 16.7%	24 100.0%	2.4583 0.9315
合計	30 21.7%	70 50.7%	32 23.2%	6 4.3%	138 100.0%	2.8986 0.7857

※ P < 0.05

(4) 学業成績による比較

定期考査の平均点を参考にして、Aランクは成績・上位、Bランクは成績・中の上位、Cランクは成績・中の下位、Dランクは成績・下位に分けた。

合同部活動については、Aランクの生徒は、「かなり賛成」33.3%と高い興味を示している。また、Cランクの生徒の平均値が最も低く、Aランクの生徒との間に大きな差がみられた。なお、Dランクの生徒の値もそれほど低いとはいえないことから、一概に学業成績が高いほど合同部活動に対する興味が高いとは言えない。

表4 合同部活動に対する学業成績による比較

学業成績	かなり賛成	やや賛成	あまり賛成しない	反対	総計	平均標準偏差
Aランク	6 33.3%	11 61.1%	1 5.6%	0.0%	18 100.0%	3.2778 0.5745
Bランク	5 13.2%	29 76.3%	4 10.5%	0.0%	38 100.0%	3.0263 0.4925
Cランク	5 12.2%	24 58.5%	9 22.0%	3 7.3%	41 100.0%	2.7561 0.7675
Dランク	8 19.5%	24 58.5%	8 19.5%	1 2.4%	41 100.0%	2.9512 0.7054
合計	24 17.4%	88 63.8%	22 15.9%	4 2.9%	138 100.0%	2.9565 0.6713

※※ P < 0.01

(5) 体育成績による比較

5段階の平均評定で、Aランクは体育成績 4.2 以上、Bランクは体育成績 3.3~4.1、Cランクは体育成績 3.2 以下に分けた。

合同部活動においては、Aランク・Bランクに大きな

差は見られなかったが、Cランクの生徒は、「あまり賛成しない」「反対」が6割弱になっている。また、平均値の比較においても、Cランクとその他のランクとの間では、統計的にも極めて強い差がみられた。このことから、体育が不得意な生徒ほど合同部活動に賛成していないことがわかった。また、合成指標では、Aランクの生徒の9割以上が合同部活動や総合型に対して関心を示している。これに対し、Cランクの生徒は、その半数しか関心を示していない。また、Cランクの生徒の平均値が最も低く、その他のランクの生徒との間において、統計的にも極めて強い差がみられた。

この結果から、一般的に体育成績上位の生徒は、運動を得意としていることが推察される。その生徒は、地域志向が高く将来においても体育・スポーツ関係に何らかの形で携わっていくことが予想される。

表5-1 合同部活動に対する体育成績の比較

体育成績	かなり賛成	やや賛成	あまり賛成しない	反対	総計	平均標準偏差
Aランク	7 16.7%	29 69.0%	6 14.3%	0.0%	42 100.0%	3.0238 0.5626
Bランク	17 20.2%	54 64.3%	11 13.1%	2 2.4%	84 100.0%	3.0238 0.6581
Cランク	0.0%	5 41.7%	5 41.7%	2 16.7%	12 100.0%	2.2500 0.7538
合計	24 17.4%	88 63.8%	22 15.9%	4 2.9%	138 100.0%	2.9565 0.6713

※※※ P < 0.001

表5-2 合成指標における体育成績の比較

体育成績	関心あり	やや関心あり	関心なし	総計	平均標準偏差
Aランク	8 19.0%	31 73.8%	3 7.1%	42 100.0%	5.9286 1.0451
Bランク	23 27.4%	49 58.3%	12 14.3%	84 100.0%	5.9881 1.1973
Cランク	3 25.0%	3 25.0%	6 50.0%	12 100.0%	4.6667 1.8257
合計	34 24.6%	83 60.1%	21 15.2%	138 100.0%	5.8551 1.2646

※※※ P < 0.001

(6) 専門種目による比較

所属している部活動を集団(野球部、バレー部、バスケット部、水球部)、個人(陸上部、器械体操部、ウエイトリフティング部)、武道(柔道部、剣道部)の3つに分類し比較を行ったが、特に大きな差は認められなかった。

(7) 部内のポジションによる比較

3年生はH15年6月現在のポジションを、2年生は現段階でのポジションを測定した。

合成指標において、「関心あり」はレギュラー、ベンチ入り、ベンチ外の順にその比率が高く、「関心なし」はその逆の傾向を示している。この結果から、競技力と合成指標との間には、相関関係が成り立っていることがわかった。

表6 合成指標におけるポジションによる比較

ポジション	関心あり	やや関心あり	関心なし	総計	平均標準偏差
レギュラー	28 26.7%	63 60.0%	14 13.3%	105 100.0%	5.9429 1.2076
ベンチ入り	3 18.8%	10 62.5%	3 18.8%	16 100.0%	5.7500 1.4376
ベンチ外	3 17.6%	10 58.8%	4 23.5%	17 100.0%	5.4118 1.4168
合計	34 24.6%	83 60.1%	21 15.2%	138 100.0%	5.8551 1.2646

(8) スポーツ観の違いによる比較

スポーツ観については、ウェブが提唱した「勝利」「フェア」「ベスト」という3類型から生徒のスポーツ観を測定した。その結果、フェアプレーの総計が3名と少なく、スポーツに対してマナーやフェアということよりも、「自分がベスト」をあるいは「勝つために」という考えが多くなっている。また、スポーツ観の違いで地域志向を比較したが、すべてにおいて、勝つこととベストはほぼ同じ結果であった。

(9) スポーツ指導の主観的意識の違いによる比較

S 高校では、県内の中学生に対して各部活動ごとに運動部活動合同練習会や全校あげて部活動体験会を実施している。そこで、中学生を指導した経験をもとに、生徒がどのように感じたかという主観的な意識を測定した。

合成指標において、「関心あり」「やや関心あり」を合わせると、非常に楽しいと感じている生徒が95.2%、楽しいと感じている生徒88.3%と高い値を示した。これらの生徒は、地域志向に対して高い関心をもっている。また、非常に楽しいと何も感じないにおいて有意な差がみられた。この結果は、地域連携におけるキーパーソン発掘の大きなヒントを示していると思われる。

表7 合成指標におけるスポーツ指導による比較

スポーツ指導	関心あり	やや関心あり	関心なし	総計	平均標準偏差
非常に楽しい	11 52.4%	9 42.9%	1 4.8%	21 100.0%	6.4762 1.3274
楽しい	15 19.5%	53 68.8%	9 11.7%	77 100.0%	5.8701 1.0557
何も感じない	5 15.6%	18 56.3%	9 28.1%	32 100.0%	5.4688 1.3437
つまらない	3 37.5%	3 37.5%	2 25.0%	8 100.0%	5.6250 2.0659
合計	34 24.6%	83 60.1%	21 15.2%	138 100.0%	5.8551 1.2646

※ P < 0.05

(10) 指導意向の違いによる比較

今後の指導意向において、ぜひ指導したいとまあまあ指導したいと回答した生徒の約9割が地域志向に関心をもっており、他のカテゴリーと大きな差がみられた。また、平均値の比較においては、ぜひ指導したいとあまり指導したくないとの間において、有意な差がみられた。

表8 合成指標における指導意向による比較

指導意向	関心あり	やや関心あり	関心なし	総計	平均標準偏差
ぜひ指導したい	9 32.1%	16 57.1%	3 10.7%	28 100.0%	6.2500 1.0758
まあまあ指導したい	14 20.6%	48 70.6%	6 8.8%	68 100.0%	5.9265 1.0695
あまり指導したくない	8 25.0%	15 46.9%	9 28.1%	32 100.0%	5.5938 1.4110
まったく指導したくない	3 30.0%	4 40.0%	3 30.0%	10 100.0%	5.1000 2.0248
合計	34 24.6%	83 60.1%	21 15.2%	138 100.0%	5.8551 1.2646

※ P < 0.05

(11) 学校行事への参加状況による比較

合同部活動・総合型のどちらにおいても学校行事に積極的な生徒ほど関心を示しており、消極的な生徒は、「関心なし」が多くなっている。また、合成指標でみると、地域志向に対して、学校行事に積極的な生徒ほど関心が高く(92.5%)、消極的な生徒ほど関心が低く(38.5%)、興味を示していないことがわかった。また、平均値の比較においても消極的な生徒とその他の生徒との間に極めて大きな差がみられた。

表9 合成指標における学校行事参加状況による比較

学校行事	関心あり	やや関心あり	関心なし	総計	平均標準偏差
積極的	10 25.0%	27 67.5%	3 7.5%	40 100.0%	6.1000 1.3166
普通	20 27.8%	44 61.1%	8 11.1%	72 100.0%	6.0278 1.0743
消極的	4 15.4%	12 46.2%	10 38.5%	26 100.0%	5.0000 1.3565
合計	34 24.6%	83 60.1%	21 15.2%	138 100.0%	5.8551 1.2646

※※※ P < 0.001

(12) ボランティア活動への参加経験による比較

ボランティア活動への個人的参加経験の有無による比較については、それぞれにおいて、大きな差は認められなかった。

(13) 地域行事への参加頻度の違いによる比較

合同部活動に対して地域行事への参加頻度が高い生徒は、9割以上が賛成しており、新しい学校部活動のあり方に対して強い関心を示していることがわかった。また、総合型に対して賛成の割合を比較すると、地域行事への参加頻度の高い生徒が80.8%と高くなっており、全然ない生徒が33.3%と低くなっている。また、反対の割合を比較すると全然ない生徒が66.7%で、かなりある生徒の19.2%に対してかなり高くなっている。合成指標でみると、地域行事への参加頻度が高い生徒の地域志向が非常に強い(92.4%)。これに対して、全然ない生徒は41.7%が「関心なし」を示した。平均値の比較においてはかなりあるが一番高く、表10-2の結果のような有意差がみられた。

このデータ結果が、今後の学校体育の新しい方向性や

生涯スポーツの必要性について、さらに、生徒の地域志向に対する意識づけの面で重要な示唆を与えてくれると思われる。

表 10-1 合成指標における地域行事参加頻度による比較

NO	地域行事	関心あり	やや関心あり	関心なし	総計	平均標準偏差
1	かなりある	12 46.2%	12 46.2%	2 7.7%	26 100.0%	6.5769 1.2704
2	ややある	13 21.3%	43 70.5%	5 8.2%	61 100.0%	5.9836 0.9745
3	あまりない	8 20.5%	22 56.4%	9 23.1%	39 100.0%	5.5897 1.2078
4	全然ない	1 8.3%	6 50.0%	5 41.7%	12 100.0%	4.5000 1.5667
合計		34 24.6%	83 60.1%	21 15.2%	138 100.0%	5.8551 1.2646

表 10-2

	かなりある	ややある	あまりない	全然ない
かなりある	※	※※	※※※	※※※
ややある		※	※※	※※
あまりない			※	※
全然ない				※

※P<0.05, ※※P<0.01, ※※※P<0.001

2) 生徒の地域志向を規定する要因

アンケートの調査内容である属性(学年、性別、性格)、成績(学業成績、体育成績)、運動部活動(専門種目、ポジション)、スポーツ意識(スポーツ観、スポーツ指導、指導意向)、行事参加意識(学校行事、ボランティア、地域行事)の13要因を説明変数とし、合同部活動及び総合型に対する生徒の地域志向をどの程度規定しているかを数量化Ⅱ類によって分析した。地域志向に関しては、「関心あり」「やや関心あり」「関心なし」の3つに類型化し、被説明変数(外的基準)として設定した。

(1) 合同部活動

合同部活動に対する生徒の地域志向を最も強く規定している項目は、地域行事である。次にスポーツ指導、体育成績、ポジションの順である。

表 11-1 数量化Ⅱ類(合同部活動)

NO	項目名	因子名	n	因子ロード	レンジ 値相関係数	レンジ順位 値相関係数
1	学年	2年	68	-0.1427	0.2736	12位
		3年	72	-0.1228	0.1920	11位
2	性別	男	102	-0.1240	0.4752	10位
		女	36	0.3512	0.1571	9位
3	性格	明朗	49	-0.2900	0.7204	7位
		普通	65	0.0597	0.1879	6位
		憂鬱	24	0.4304		
4	学業成績	上位	18	0.1086	0.4760	9位
		中上位	38	0.1193	0.1623	8位
		中下位	41	-0.3171		
		下位	41	0.1598		
5	体育成績	上位	42	-0.0074	1.0163	3位
		中位	84	0.1303	0.2150	3位
		下位	12	-0.8861		
6	専門種目	集団	56	0.2737	0.5192	8位
		個人	51	-0.1513	0.1682	7位
7	ポジション	レギュラー	105	0.1490	0.8505	5位
		ベンチ入	16	-0.2329	0.2149	4位
		ベンチ外	17	-0.7014		
8	スポーツ重視	勝利	54	0.1001	0.9770	4位
		フェア	3	-0.8788	0.1186	10位
		ベスト	81	-0.0343		
9	スポーツ指導	積極的	21	0.6121	1.0955	2位
		やや積極的	77	0.0487	0.2607	2位
		やや消極的	32	-0.4834		
		消極的	8	-0.1513		
10	指導意向	積極的	28	-0.2192	0.3252	11位
		やや積極的	68	0.0596	0.0936	12位
		やや消極的	32	0.1069		
		消極的	10	-0.1303		
11	学校行事	積極的	40	-0.0429	0.7577	6位
		普通	72	0.2185	0.2065	5位
		消極的	26	-0.5391		
12	ボランティア	あり	73	0.0478	0.1015	13位
		なし	65	-0.0537	0.0375	13位
13	地域行事	かなりある	26	1.0120	1.6900	1位
		ややある	61	0.1085	0.3983	1位
		あまりない	39	-0.6358		
		ない	12	-0.6779		
外的基準		関心あり群	24	0.6885	$r^2 =$	
		ややあり群	88	0.1903	0.4141	
		関心なし群	26	-1.2797		

(2) 総合型

総合型に対する生徒の地域志向を最も強く規定している項目は、合同部活動同様地域行事である。しかし、次に規定力の強い項目を見てみると、学年、スポーツ指導、学校行事の順になっており、合同部活動とは違う結果が得られた。

表 11-2 数量化Ⅱ類(総合型)

NO	項目名	因子名	n	因子ロード	レンジ 値相関係数	レンジ順位 値相関係数
1	学年	2年	66	-0.5386	1.0323	4位
		3年	72	0.4937	0.3307	2位
2	性別	男	102	-0.1024	0.3926	9位
		女	36	0.2892	0.1182	8位
3	性格	明朗	49	-0.2078	0.3317	10位
		普通	65	0.1239	0.1056	9位
		憂鬱	24	0.0889		
4	学業成績	上位	18	0.2738	0.6900	6位
		中上位	38	-0.4162	0.1838	6位
		中下位	41	0.0688		
		下位	41	0.1988		
5	体育成績	上位	42	-0.1271	0.2053	13位
		中位	84	0.0782	0.0694	12位
		下位	12	-0.1028		
6	専門種目	集団	56	0.1673	0.4115	8位
		個人	51	-0.2443	0.1254	7位
7	ポジション	レギュラー	105	0.0326	0.2133	12位
		ベンチ入	16	-0.0223	0.0470	13位
		ベンチ外	17	-0.1807		
8	スポーツ重視	勝利	54	0.2186	1.9262	2位
		フェア	3	-1.7075	0.2053	5位
		ベスト	81	-0.0825		
9	スポーツ指導	積極的	21	0.5707	1.8159	3位
		やや積極的	77	0.1099	0.2792	3位
		やや消極的	32	-0.3277		
		消極的	8	-1.2452		
10	指導意向	積極的	28	0.1188	0.4394	7位
		やや積極的	68	-0.1401	0.0976	10位
		やや消極的	32	0.1001		
		消極的	10	0.2293		
11	学校行事	積極的	40	0.0535	0.9236	5位
		普通	72	0.2232	0.2204	4位
		消極的	26	-0.7004		
12	ボランティア	あり	73	-0.1282	0.2679	11位
		なし	65	0.1417	0.0854	11位
13	地域行事	かなりある	26	0.7472	2.0834	1位
		ややある	61	0.1212	0.3350	1位
		あまりない	39	-0.2766		
		ない	12	-1.3362		
外的基準		関心あり群	30	0.7774	$r^2 =$	
		ややあり群	70	0.1404	0.3509	
		関心なし群	38	-0.8723		

(3) まとめ

全体を見比べながら規定力の強い要因を分析してみると、地域志向に関して最も興味を示している生徒は、地域行事に多く参加したことのある生徒で、複数の学校が合同で実施したり、地域のスポーツクラブと協力して活動する新しい運動部活動の取り組みである合同部活動への関心は非常に高いものがある。総合型地域スポーツクラブについての関心もかなり高くなっており、地域連携によるスポーツ振興・発展をキーワードにした新しい取り組みにおいて、極めて重要なヒントを与えてくれる結果が得られた。さらに、中学生のスポーツ指導について積極的な生徒ほど合同部活動には強い関心をもっており、総合型に対しても強い関与を示している。「生きる力」を重視しながら、自主的・自発的なスポーツ実践をめざす学習目標達成の指導法についても、大きな方向性が示唆された。

学年による差をみてみると、総合型について上級学年の方が強く規定しているが、これは、体育理論の授業において総合型の授業を以前から受講している3年生の方が、理解度が高いからであると考えられる。

また、体育成績が上位の生徒、いわゆる体育を得意としている生徒は、合同部活動に強く関心をもっているが、総合型にはあまり関心を抱いていないようである。

学業成績の比較についての結果によると、成績上位の生徒が合同部活動・総合型いずれにおいても高い関心を示している。やはり、授業等における理解力の違いによるものと推察されるが、総合型において成績下位の生徒も7割以上が賛成しており、一概には言えないであろう。さらに、学校行事に積極的に参加している生徒は地域志向に関心が高く、地域行事参加状況ほどの規定力はないが、かなり参考になる結果が得られた。

外的基準との対応では、地域行事への参加が多い生徒はもちろんのこと、スポーツ指導に積極的な生徒や3年生および女子が「関心あり群」に関与している結果が得られた。しかし、相関比をみてみると、合同部活動0.41、総合型0.35であり、他の要因が多く関連していることがわかる。

これらの結果から、本研究の枠組みである地域連携を推進していくキーパーソンを発掘する上で、非常に参考となる結果が得られたと同時に、キーパーソンを中心とした主導集団の育成や全生徒への波及効果を促進する保健体育科教師の新たな指導方法についても大変重要な示唆を得ることができた。

2. 高等学校と地域連携に関する取り組み

1) チャレンジハイスクールについて

宮城県教育委員会は、高校教育の改善に資するため、「みやぎ高校いきいき夢プラン事業」を設け、活性化を図

る特色ある学校・開かれた学校づくりに取り組む学校(以下チャレンジハイスクールという)を募集した。S高校においても、体育科を中心として、地域連携、中学・高校・大学の異校種間連携による授業システムの改善を図り、体育・スポーツの指導者ならびに生涯スポーツ推進者として必要な理論と実践を学習し、地域の体育振興に寄与できるものを育成する内容が採用され指定を受けた。

2) S高校の取り組み概要

S高校が立地する柴田町では、平成13年に「しばたスポーツプラン21」を策定している。その中の主要課題として、東北唯一の体育系大学である仙台大学、体育科を有するS校との連携事業及び、小・中学校の体育スポーツ活動の充実への期待が明記されている。

今後の学校体育の進むべき方向を考えると、異校種間・地域の連携による開かれた学校づくりにより、こどもの体力低下の打開策の検討や、生涯にわたって健康で豊かな生活を送るQOLの重要性を再認識させ実践していく役割がある。

S校においても、生涯スポーツ社会を視野に入れた授業内容への改善を図り、仙台大学が備えているスポーツに関わる資源を大いに活用させていただき、それにより学び得た知識・資源を地域との連携の中で小・中学校へ還元し、また、地域住民への学校施設の開放や授業開放等を通して、地域に開かれた学校づくりを推進していくことを目的としている。

「地域連携」をキーワードに、小学校・中学校・高等学校・大学との連携から健康で豊かな生活を目指した活力ある柴田町に貢献できる体育指導者育成プログラムの開発を目指している。

3) 内容

①1年目(学習する)

スポーツの特性を生理学・医科学的分野から理解を深め、体力の向上を図る。

②2年目(計画する)

発育・発達段階に応じた体力・技術向上のための理論習得とコンディショニングをプログラミングさせる。

③3年目(実践する)

スポーツと地域社会との関わりについての知識・理解を深め実践する。

4) 1年目の取り組みについて

①大学教授によるデリバリー授業

②運動部活動合同練習会の実施

体育科を設置するS高校が有する施設・設備および指導者という資源を、県内の小・中学校に開放しながらS

ポーツ活動の発展に寄与していく目的で、運動部活動合同練習会を実施している。

③授業見学旬間

地域に根ざした開かれた学校づくりのため、授業見学旬間を設定し、保護者や地域住民に学校の運営状況や施設、授業についての評価をしてもらう。本校教育の質の向上と充実をはかり、地域連携による、よりよい学校づくりおよび学校活性化を目指している。

IV. 結 論

1. 学校と地域のかかわり

2000年8月に保健体育審議会から答申された「豊かなスポーツ環境を目指したスポーツ振興基本計画の在り方」²⁾を受けて、2002年12月に策定された宮城県スポーツ振興基本計画⁷⁾における基本施策の一つに、地域と連携した学校体育・スポーツの推進に向けた環境の充実が挙げられた。

また、高等学校において2003年4月から第1学年より学年進行で実施された新学習指導要領⁹⁾においても、新設された「総合的な学習の時間」を展開していく上で、学校と地域社会の連携が重要なキーワードとなっている。

今日の教育システムにおいて、学校の組織運営面からも学社連携が早急に求められているといえよう。また、学校と地域社会の連携および推進は、単なる学校だけの問題ではなく、同時に、生涯学習時代における現代社会の強い要請であることも明らかである。

2. 地域連携にかかわるキーパーソン

総合型地域スポーツクラブや地域クラブの充実した活動を実践していくためには、その組織におけるキーパーソンの存在が何よりも重要である。学校体育、中でも体育・スポーツ指導者や生涯スポーツ推進者を育成する高等学校体育科においては、その育成が急務の課題としてある。

本研究の結果から、高等学校体育科生徒の中で、地域連携を推進していくキーパーソンとなりうる可能性のある生徒は、次の条件を満たす生徒であると考えられる。
①地域の行事に数多く参加したことがあるもの。②学校行事の意義を理解し、積極的に参加するもの。③スポーツ指導に積極的に取り組むもの。④体育・運動を得意としているもの。⑤スポーツ経験の豊富なもの。これらの条件を多く満たす生徒ほど、キーパーソンとしての力量を発揮すると思われる。

3. 地域連携にかかわる主導集団の育成

学校体育は、平成元年の学習指導要領⁸⁾の改訂により個性を重視した教育、すなわち「生き方」の教育が重視

され、選択制が導入された。選択制は、生徒の興味関心に応じた種目を選択させ、自主・自発的に授業を展開するものである。さらに、冒頭にも述べた、平成11年の学習指導要領改訂⁹⁾では、心と体を一体として捉える考え方や家庭・地域社会との連携を図りながら、生涯スポーツを志向する意識の育成が重要視されている。このような社会的ニーズへの対応として、地域連携を推進していくキーパーソンの発掘・育成とともに主導集団の育成が大切である。この育成に対する学校体育のシステムの再考が、今日的課題であると思われる。

本研究が対象としたS高等学校体育科生徒の中で、地域行事への参加頻度の高い生徒や学校行事を肯定的に捉えている生徒は、キーパーソンになりうる可能性が高いことが明らかになった。

この結果はさらに、保健体育の授業においてイベント的な要素を多く取り入れた内容の工夫や、学校全体として地域イベントに積極的に参加させることができるシステムを構築し、実践することにより、キーパーソンや主導集団の育成に寄与することが考えられる。シーデントップ¹⁴⁾が提唱した「スポーツ教育実践モデル」は、日本の学校体育にはほとんど見受けられない祭典性やイベント性を重視した、新しい発想の教科体育である。このようなモデルを参考に実践していくことにより、キーパーソンを核とした主導集団の育成が図れると思われる。さらに、地域との連携活動の推進に役立つと確信しうる。

4. 研究成果の学校教育現場へのフィードバックと今後の課題

本研究の結果は、生涯スポーツ時代を迎えた現代において、地域社会との連携による開かれた学校体育を目指す現場に対してフィードバックしうる、ある程度の成果が得られたといえよう。本研究の分析結果から、キーパーソンになりうる生徒の発掘や主導集団の育成方法を見出すことができた。また、本研究の枠組みである「地域との連携モデル」に従い、今後の学校体育の教育実践に生かしていきたいと考えている。

さらに、保健体育教師への提言も与えてくれた。それは、保健体育教師自身が、生涯スポーツ推進の先駆者になるべき使命があり、合同部活動や総合型にかかわる地域連携事業に対して、率先垂範して取り組まなければならない、ということである。

今回の研究結果は、S高校が現在実施しているチャレンジハイスクールの2年目・3年目の取り組みに生かしていきたいと考えている。さらに、3年後の成果を縦断的な追跡調査により研究分析することを今後の課題とする。

参考文献・引用文献一覧

- 1) 赤星晋作 (2001) 学校・地域・大学のパートナーシップ. 学分社.
- 2) 保健体育審議会答申(2000)「豊かなスポーツ環境を目指したスポーツ振興基本計画の在り方」
- 3) 川西正志・野川春夫編著 (2002) 生涯スポーツ実践論. 市村出版.
- 4) 丸山富雄 (1988) わが国における階層構造とスポーツ参与の研究. 昭和 62・63 年度文部省科学研究費(一般研究 C) 研究成果報告書.
- 5) 丸山富雄編著 (2000) 現代スポーツ論, 中央法規.
- 6) 宮城県教育委員会 (1997) みやぎ新時代教育ビジョン 宮城県学校教育長期計画.
- 7) 宮城県教育委員会 (2002) 宮城県スポーツ振興基本計画
- 8) 文部省 (1989) 高等学校学習指導要領
- 9) 文部省 (1999) 高等学校学習指導要領
- 10) 文部科学省(2001)「総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル」クラブづくりの4つのドア.
- 11) 臨時教育審議会答申 (1985～1987)「教育改革に関する第1次から第4次」
- 12) 作野誠一 (2000) コミュニティ型スポーツクラブの形成過程に関する研究, 体育学研究 45(3): 360-376.
- 13) 柴田町教育委員会 (2002) 柴田町生涯スポーツ振興計画 しばたスポーツプラン 21.
- 14) シーデントップ: 高橋建夫監訳 (2003) 新しい体育授業の創造, 大修館書店.
- 15) 高橋建夫・落合優・小沢治夫・柳沢和雄・友添秀則編著 (2003) 最新体育・スポーツ理論, 大修館書店.
- 16) 中央教育審議会第一次答申 (1996)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
- 17) 八代勉 (1996) 21世紀社会のスポーツ環境, スポーツと健康 29(11): 5-8.